

日本人フランス移住者の移住談内に現れる 「第三の主体」

矢野 禎子

1. はじめに

以下は社会学的調査のために実施されたフランス語ネイティブ話者へのフランス語でのインタビューの一部である。

EQ : mhm .. et où tu as pris la mesure.

A : Et où j'ai pris la mesure déjà *oui*.

EQ : Parce que si tu sais que tu peux prendre la mesure ça pourrait provoquer des analogies entre les espaces (difficilement audible).

A : *Oui* peut-être où je retrouve quelque chose que j'ai *oui* qui est de l'ordre de de. qui peut s'inscrire dans un souvenir et dans un savoir.

...

EQ : Et tu mets les deux sur le même c'est la même honte.

A : *Ah oui* dans mon dans mon dans mon mon imaginaire enfantin c'était la même chose. C'était des paumés quoi, c'était.

EQ : Mais en même temps avec un plaisir de, de cette nourriture de cette fête.

A : *Oui*, parce que ma mère est une cuisinière hors pair, une très très bonne cuisinière...

次は筆者の研究の情報提供者であるマヤ（30代・女性・日本語講師）が、フランスでの生活内で好きになれないことは何かという問いに対し、「フランス語が解らないと会話に参加できない」ということを自身の経験をもとに語っている部分である。

« Mais... ça c'est peut-être habitude française, *je ne sais pas*... Ne fait pas... ne fait pas... Parce qu'au Japon, on fait, on fait vraiment attention que, de sentiment de quelqu'un d'autre. Si on fait pas mal à des autres tout ça. Mais en France les gens s'en foutent en fait, *ouais*... Mais en inversement, c'est *oui*, c'est, des fois c'est, c'est, on voit que un peu méchant mais des fois c'est bien. Parce que, si on fait quelque chose, parce que j'ai envie, mais, si, au Japon, peut-être c'est pas possible de faire, comme, comme on veut parce que des fois, les gens pensent que c'est bizarre donc je ne fais pas. Mais ici, les gens dit que oh ! fais comme je veux ! ça c'est agréable hein en France. »

この二つの談話内で発話者が発する *oui* や *non* といった表現に注目する。一つ目のフランス語母語話者のコーパスでは、*oui* の機能は多くが発話冒頭に出現していることから裏付けられる通り、質問あるいは質問者へ向けられたものとはほ言い切れるものだろう。それに対してマヤの談話では、彼女がテーマについての否定的な意見提示を肯定的に転換させる場面で、「*ouais*», 「*oui*」と相槌を打つような、何かに呼応するような発話が見受けられる（これに順ずる表現を以下「自己相槌」とよぶ）。彼女の発話中、筆者は発言していない。それでは彼女の *oui* は誰に対して向けられ、どのような意味を持ち得るだろうか。この談話の場には語り手であるマヤと聞き手である筆者以外に見えない「第三の主体」がいるのではないだろうか。

本稿では筆者の行った面談によって構築された「移住談」内に現れた「第三の主体」を考察するにあたり、まず始めに本研究でも用いたインタビュー手法の特徴、コーパスとしての有用性や疑問点を整理し、筆者が研究で使用しているコーパスの特徴を確認する。次に、日本人の談話構築についての先行研究を参考にその特徴を確認する。そして、在仏日本人の移住経験の語りに見られた「自己相槌」を分析し、インタビューの場に現れる「第三の主体」について考察、分析から見出された結果をまとめ、インタビュー手法によって構築された「語り」のコーパスと主体の複数性の研究の可能性についてまとめる。

2. 本研究の面談手法と「語り」のコーパス

2-1. KAUFMANN による面談手法の実践とコーパス構築

情報提供者の「語り」のコーパスは、その情報量の豊富さと「叙述性 *narrativité*」により、それぞれの情報提供者に独特の軌跡、ある行為の理由や、その行為の動機の詳細などの量的調査では見落とされがちであった側面へ焦点を当てることを可能とするため、大きな発展を遂げている。一方で、聞き手が語り手の発言を誘導することが可能であること、研究者の存在自体が情報提供者の語りに影響を及ぼす可能性や語り手が聞き手の意向をくみ取って聞き手の期待に応えようとする傾向があることなどから、情報の信びよう性に疑問を投げかける声も存在する。収集した語りの分析と解釈にもまた、科学的客観性の欠如が唱えられることがある。聞き手である研究者も語り手である情報提供者との関係性や感情の中で、語りの解釈を変化させる可能性があることや、ライフストーリーによって得た情報が事実かどうかの検証が難しいことなどがその理由として挙げられる。このような面談手法に向けられる批判を回避するためにこの手の手法を使用した研究では、研究者はほんのわずかな不具合の兆候にまで神経質になり、実際のコーパス構築の手法や手順を隠蔽し、引用によって武装した方法論についての分厚い章を執筆する (KAUFMANN 2001: 10)。しかし、KAUFMANN はこれを「不健全」とし、「包括的面談 *Entretien compréhensif*」の手法を提唱する。これは情報提供者の発言をよりどころとする今までの半構造化面談を土台とし、質的かつ経験的な技法、特にフィールドワークの蓄積から執筆される民族学者の民族誌をもとに構想された手法である。従

来の社会学の研究が、フィールドを前もって論じられ固定された理論や仮説の確認の場としてきたのに対し、entretien compréhensifはフィールドを問題提起の場と捉える。研究者はフィールドでのインタビューから仮説を構築し、その仮説の妥当性をまたフィールド内において検討、絶えず見直しや「鍛え上げ」を行っていく。KAUFMANNはこのように理論とフィールドの実際の知識を絶えず行き来することによって、学術研究が陥りがちな「学説と現実の乖離」を最小限に抑えることができ、研究結果の信ぴょう性が確保されるとしている。フィールドと理論との関係を常に絶やさず、綿密かつ論理的な手順を追いながら各情報提供者の豊かな知識や経験、情報へのアクセスを試みるKAUFMANNの面談手法は、「異言語／文化を生きる主体は複数である」という考えを基に「在仏日本人のフランス移住について多角的かつ詳細に考察を深めたい」と考える筆者の研究のコーパス構築にふさわしいと考え、筆者は実践に活かすことにした。次では本研究の実際のコーパス構築とその特徴を確認する。

2-3. 本研究のコーパス「移住談」の構築

2014年1月からこれまで、2年以上フランスに滞在する（或いはした）日本国籍を持ち日本語を母語とする15名と面談を行った。各面談は短いもので40分、長いものは1時間半ほどで、情報提供者の了承を得て録音をしたものを後日文字に起こしてコーパスとして研究に使用している¹⁾。筆者自身の経験から、日本語では言い表せないことがあるのではないかと考え、情報提供者にフランス語によるインタビューを打診した。多くの情報提供者がはじめは難色を示したため、使用言語の選択は任意としたが最終的に15名中12名がフランス語によるインタビューに応じた。インタビューの準備として、まず初めに筆者の良く知る、上述の条件に当てはまる日本人女性に、自身のフランス移住経験を語るにあたりどのようなテーマが思い浮かぶか、どのような事柄が重要であるか、どんな質問なら積極的に発言できるかを尋ね、渡仏の動機、言語習得、フランス生活の感想に大別されるいくつかの質問を用意した。

実際インタビューを行うにあたり、参考にした理論や方法論ではうまくいかない場面がいくつかあった。まず、インタビューを受けることに初めから積極的な態度を示した情報提供者は少数で、匿名性の確保や秘密の保持などを丁寧に説明し了承を取り付けた。また、「あなたの経験について自由に語ってください」といったライフストーリー収集の一番基本の形式の面談は機能せず、筆者が用意した質問票をもとに明確に問題提起をする場合や、必要であれば筆者が具体例を挙げたりした方が発話が活発となるケースが見受けられたため、KAUFMANNの推奨する通り、筆者は自身の存在や発言を排除することに努めなかった。しかし、批判の一つにもあるように、筆者がテーマや情報提供者の発話に関連する意見や評価を明確に述べると、それに情報提供者が同調する恐れが大いにあるため、情報提供者の発言中、筆者はできる限り発言を控えた。使用言語については、フランス語の使用が発話の理解度などに重大に影響することもなく、また2名の情報提供者は「日本語での実施であつたらこんなに話せなかったかもしれな

い」といった趣旨の発言もしている。インタビュー内での使用言語はいつでも変更できるため、フランス語での説明が不可能な場合は日本語を使用したり、日本語でのインタビューにフランス語が使われたりすることもあった。情報提供者のプロフィールはなるべく多様性を確保したいと考えたが現段階では、男性が15名中4名と少なく、年齢層も20代後半から30代が大半を占めている。

これから分析する面談手法によって収集した移住に関連する語りである「移住談」は、以上の記述からもわかる通りいくつかの特徴がある。まず初めに、聞き手である筆者が話し手である情報提供者のプロフィール（2年以上在仏の日本人）という条件を満たしていること、そして、そのように共通点を持つ日本人同士がフランス語でやりとりをすること、また、聞き手である筆者も必要に応じて発言し存在を排除しないこと、これは筆者のコーパス特有の特徴ではないが、二名が存在する会話の中で雑談とは違い質問者と回答者、聞き手と話し手が明確に役割を担って存在していることである。

これらを踏まえたうえで、以下ではまず先行研究によって明らかになった日本人の談話や語りの特徴を紹介する。そして本研究のコーパスと先行研究との類似点と相違点を確認したのち、本研究の「移住談」に現れた「自己相槌」に注目しながら談話を分析し、在仏日本人の移住経験に関する語りに現れる「第三の主体」について考察する。

3. 日本人の「語り」の特徴

3-1. 日常会話における自己語りに見る特徴

日本人の「自己語り」についての先行研究で服部と佐々木（2016）は、臨床心理面接において自己を語ることを考察する準備段階として、日本人の日常会話における自己語りがどのように行われるかを調査している。そしてその調査理由を次のように述べている。「（友人同士の雑談は）2人一組の言語的なやりとりを主にした関わりであると言う構造はカウンセリング対話と類似している。その一方で既知の関係であり、語り手、聞き手が明確に分かれておらず、話すテーマなどが設定されていないという点でカウンセリング対話とは異なっている（…）。これらを比較対象とすることでよりカウンセリング対話の特異性が明らかになりやすいのではないかと考えられる。」（同 37）。服部と佐々木は、雑談内の自己語りに関する発話を大きく1. 事実情報自己語り（事実）、2. 自己言及的自己語り（経験、予定、思考など）、3. 応答的自己語り（相槌、質問、同意など）に分けて、それらが占める割合を調査している。それによると会話の中で最も多く見られたのは「応答的自己語り」で45%を占め、下位分類の相槌が34%と最も多くみられている。調査した雑談内では自己言及的自己語りが続く箇所が少ないが、その詳細を見るとこの場合では聞き手が相槌を繰り返すことが明らかにされている。また別の視点からは、調査した38の話題のうち26の話題が聞き手によって終了されており、語り手によって終了される場合の24%を大きく上回っている。以上のことから、日本人の雑談内での自己語りの特徴的な点として、相槌の多さと、自己のある側面について語り手が自分の話が尽きるまで語ることの少なさが明らかになった（同 42）。

先にも述べた通り移住談も「非友人同士」によって行われ、聞き手と語り手の明確な役割分担、テーマの設定があるため、カウンセリング対話同様、雑誌とは一線を画したコミュニケーションであると言える。

3-2. 相槌の機能

日本人の会話内での相槌の多さはすでに様々な研究によって指摘されているが、稲井はこのことから相槌が日本語会話の構造を作る重要な要素かつ日本人の文化的特徴と何らかの関わりがあると考え、情報提供者を相槌を打つ／我慢するグループに分け調査を行っている（稲井 2005）。これによると、相槌を打たないグループでは話の内容に対する感想が報告されにくくなったり、エピソード直後に想像が膨らみにくくなったり、感情が動きにくくなったりすることが報告されている。これは、語られたことを理解し共感するためには、話を聞くばかりではなく、話しの内容に即応した感概を聞き手自身の声や身振りを通して味わうことが必要である可能性を示唆している（同 229）。また、相槌は語り手の発話を促す肯定的なメッセージとして認識されるため、相槌を打つことにより会話への参加者の関係が親和的に維持されるという機能も確認されている。相手との関係性の重視は日本人の対人関係構築の特徴としても挙げられている。アメリカ人と日本人の対人認知を比較すると日本人は対人関係の構築に慎重であり、また相手も慎重であろうとの考えから初対面の相手が自分に肯定的な反応をすぐに示すことを期待しておらず、自分も中立的反応をしめすという傾向があるという（山本・原 2006）。

3-3. 日本人の意見の述べ方の特徴

WATANABE は日本人が意見を述べるとき、時に反対の立場に立ってみたりと一貫性を欠いた述べ方をしたり、ストーリーのような形を用いるのに対し、アメリカ人グループは一貫した主張のもとに論理的に理由を提示する傾向があるとしている（WATANABE 1993）。主張の一貫性の欠如は、YATABE が在日日本人について行った表象に関する量的調査（YATABE 1994）、岩崎が在日日本人と日本の大学生を対象に行った調査（岩崎 2007）によって明らかになった表象提示の方法にも関連する。日本人の日仏に対する表象提示は、「働きもの／怠け者」のように対照項をなして提示される場合が多く、また評価がどちらか一方に好意的、あるいは否定的に提示される場合が少ない。アメリカ人と日本人の意見の述べ方の談話の対照分析を行った上田は、日本語のディスカッションには 1. 頻繁に打たれる相槌とそれに伴う発話の打ち切り、2. 複数の参加者が一つの発言を協働して作り上げる現象の二点が特徴として存在することを指摘している（上田 2008）。1. の特徴についてはさらに、聞き手が肯定的な相槌を打つと語り手は発言を不完全なまま打ち切る現象が起こることが指摘されている。これらのことから上田は日本語の会話では、誰かが話し始めるとき他の参加者はただの「聞き手」に留まらず、語り手の語りや思考過程に入り込んで共に語り手の発話を構築していると考えられている（同 27）。そして、相槌を頻繁に打たず、それぞれの語り手が発言を完結し、参加者とそれを交換しながら考えを深めていく米語のディスカッションとは

違い、日本語のそれでは参加者が共同して発話を繋げ共に考えていくことがディスカッションの前提とされていると結論付けている（同31）。

4. コーパスに現れた「自己相槌」と「第三の主体」²⁾

4-1. 「自己語り」の「共構築」

先行研究から、日本語による談話構築は相槌の多さ、意見や主張の発話の途中終了、主張の非一貫性と複数の参加者による発言の協働構築によって特徴づけることができる。そしてこれらの特徴は、他の参加者との相互作用内の事象という共通項でくることができ、これまで言及してきた先行研究のコーパス、あるいは研究の対象は、雑談やディスカッションといった参加者に事前に明確な「聞き手」「語り手」の役割付与がないケースがほとんどで、発話者の発話に対する他の参加者の相槌に注目したものである。しかし以下で分析する在仏日本人の談話は、「聞き手」と「語り手」が明確に分かれた状況においてなされたもので、フランス語による発話であることも先行研究とは異なっている。また、筆者は情報提供者の発言中に自身が発言することを極力控えているため、先行研究で扱われたような雑談やディスカッションとも大きく異なっている。しかし彼らの語りには、これまで見てきた先行研究で指摘された日本人の談話構築の特徴に類似した点が見受けられる。以下ではその類似点を分析することにより、インタビューの場に現れた「聞き手」でも「語り手」でもない第三者の存在と、その見えない「第三の主体」の談話内における役割の可能性について論じる。

4-2. 「自己相槌」

本稿冒頭で提示したマヤの談話では、フランス人の恋人やその友人が、フランス語の習得がまだ道半ばで会話に参加できないマヤを気に留めなかったことが否定的に語られたのち、彼女が「oui」などの自己相槌を境に最終的にそれを肯定的に捉えなおしている様子が確認された。これに関連して以下のアヤカ（30代・女性・日本語講師／ガイド）、リナ（20代・女性・求職中）、コウタ（20代・男性・大学院生）の発話を確認する。

« [日本の集団主義, フランスの個人主義という表象について] On vit en pensant aux autres, au Japon. Mais en France, c'est pas comme ça en France... (他の人のことを考えない?) Non j'ai pas, je peux pas dire qu'on pense pas aux autres. On... oui... Quais ah... euh... au travail, c'est bien de, c'est bien d'être individualiste, au travail... Mais... ah... je sais pas... J'ai pas trop de, de Français... à côté de, à côté de moi, qui sont in, individualistes. Y a que des gens qui ont, qui pensent aux autres. Je n'ai pas, rencontré... Français, en Français, par exemple si qui... qui s'en fout de, qui s'en fout de notre. » (アヤカ)

アヤカはまず、日本では人びとが他者への気配りをして生きており、フランスでは

そうではない、と述べる。筆者が「フランスでは他人を考えない？」と質問しなおすと、これに「そうとは言えない」と答え、沈黙や「oui」、「ouais」といった表現を交えながら、個人主義の良い点を挙げ、さらに「自分の周りには他を考えないフランス人がいない」と初めの発言と相違する事柄を述べるに至っている。

« [フランス人の表象について] Hmm pour moi c'est c'est le cliché de, des gens... parisiens, par exemple... euh qui mangent toujours baguette, du fromage du vin et... il fait le, le plainte, toujours. Et... c'est pas forcément toujours mais ils font souvent je crois... Mais non ils sont sympas ils sont sympas ouais. (あなたの恋人は?) Euh non. Ouais ça m'étonne mais oui. Il vient de, de Paris, aussi. Mais, il est pas du tout chiant. Il est pas chiant... Ouais il est très orga très organisé... Et euh nous on peut, en fait, non on peut discuter beaucoup de choses, très sérieusement et... Ouais c'est bien. Il est différent je pense, je pense. » (リナ)

リナはフランス人の表象としてパリジャンに対する常套句を挙げ、「文句が多い」と否定的な意味に捉えられることの多い描写をしている。しかしその後「Mais non」と自身の発言に対し否定の表現を示し、「彼らは感じがいい」という一般的なコノテーションとは逆の評価を提示し、「ouais」という同意表現で締めくくっている。リナのパリ出身の恋人にも彼女の提示した表象が当てはまるかと尋ねると、「彼は違う」ことが「oui」、「ouais」と確認を取るような、何かに呼応するような表現の頻出を伴って述べられる。

そして下のコウタの発言は、筆者が彼に日本語を使用しない生活が可能か尋ねたところである。彼ははじめ「日本語は美しいと思うが、恋しいとは思わない」や、「フランス語を使うことが普通で、日本語の単語を忘れて人に尋ねることがある」などと、自身の日本語への固執の少なさを語る。しかしその後、彼と日本語の関係をどのように描写することができるかを問うと、以下のように日本語は彼にとって重要であるとテーマ冒頭の「無関心」とは逆行する意見を述べている。

« Hm... Ouais mais c'est ... c'est la seule communication, ... c'est la seule moyen de communiquer avec mes amis donc, avec mes amis japonais... donc c'est très important pour moi. Je vais jamais oublier. Et en général on oublie pas donc... Oui c'est une langue très important pour moi. » (コウタ)

ここでも、前言の主張の逆転に際し、発言がとぎれとぎれになり「oui」、「ouais」という自己相槌が現れる。

このように4名の情報提供者の発言からは、まず彼らの一テーマに関する主張や意見が一貫性を持たないことが見てとれる。そして彼らが主張を転換する際に

は「oui」、「ouais」や「non」といった自己相槌、何かを確認するような表現、「内なる声」に呼応するような様子が見受けられ、そしてこれらは「je ne sais pas」や短い沈黙などの迷いや不確かさの表現を伴って現れるという傾向が見出された。これらの現象、意見の一貫性の欠如や自己相槌は、他の参加者の不在を語り手自身が補っていることに起因するとは考えられないだろうか。彼らはテーマについての発話の中で意見や主張を流動的に構築、あるいは再構築しており、たとえフランス語での発話であっても、語りの場に談話構築で相槌や協働発話、発話の終了のきっかけと様々な役割を担う聞き手が不在であっても、談話構築の様子は日本人あるいは日本語の雑誌やディスカッションにおける談話構築の特徴を色濃く帯びている。これは語り手が他の参加者をも兼ねる主体の複数化によって談話の構築実現されていると考えられないだろうか。筆者は質問をしたり、情報提供者の発話に関連してさらなる説明を求めたりしており、確かにこれも彼らが自身の意見や主張を転換する契機として機能している場面もある。しかし筆者は彼らが発話している際に発話や言語表現としての反応を行っていないため、彼らが発話内で「oui」や「non」を用い呼応している対象は必ずしも筆者自身ではないと思われる。ここから、面談の場には「聞き手」である筆者、「語り手」である情報提供者の他に、「語り手」が共に談話を構築する「第三の主体」が存在すると考えられる。また、先行研究内でいくつか「日本語による」談話、発話という表現が使用されているが、相槌や談話の共構築という特徴は、日本人が日本人を前に「フランス語で」発話する際にも見受けられることから、日本語という言語そのものの特徴にこれらを還元することは妥当ではないと考えられる。第三の主体は、発話主体が今まで述べていた事柄や意見を逆転させる重要な主体である。この重要な主体の出現の前触れとして「自己相槌」が現れると言えるのではないだろうか。

5. 日本人の「移住談」と主体の複数性の研究の可能性

本論における在日日本人の移住経験に関する語りのコーパスの分析と考察で明らかになった、面談の場における「聞き手」と「語り手」以外に見えない「第三の主体」の存在は、「主体の複数性」の概念を考慮せずに論ずることはできない。主体が確固たる一貫性と均質性を持つことを前提としてきた今までの言語学や社会学においては、本論で確認された、情報提供者が同一テーマについて流動的に意見や主張を変え、なおかつそれをその場に物理的に存在する他者以外の何者かとの協働して行うというこの現象を扱い説明することは困難である。PRIEURの提唱する言語人類学では、「(たとえ日本語、フランス語等の区分で主体が一言語しか話さなかったとしても)混成でない言語はなく、多様でない主観性は存在しない(PRIEUR 2005:4)」とする仮説から、言語、アイデンティティ、集団を有限で区分可能な実体として捉えるのではなく、不連続性、変動性、複数性の概念を念頭に置いた研究のアプローチを提唱している。これによるとディスカール、陳述に対する姿勢、あるいは言語の変化は、発話主体が参照する想像界の変化によって引き起こされるものであり、発話主体の複数の「主観的ありかた

positions subjectives」間の変化によるものである。

断絶、変動性、不連続性や多様性の中に行われる異言語／文化への移動、移住という経験についての「語り」と、日本人の談話構築の特徴である主張の非一貫性や意見の流動性、テーマに関する談話の協働構築という要素が一度に現れる在仏日本人の移住談話は、これまでの人文社会学系の研究が十分に扱ってこなかった主体の複数性の存在を示し、今までとは違った形で「主体」を記述する可能性を開くのではないだろうか。確かに、日本人が日本人の前に異言語で発話する、という不自然な状況においては、談話の内容や言語表現が制限されてしまう可能性があることは否定できない。しかし、どのような特徴が言語自体に由来し、どのような事象や傾向が、漠然とし捉えどころのない、しかしながら日常会話においても学術的な考察においても良く耳にする「日本的なもの」であるかを峻別する手がかりもまた、このような研究から明らかにすることが可能になるのではないだろうか。

6. おわりに

コーパスの分析により、在仏日本人との面談の場には「聞き手」、「語り手」の他に語り手の談話を協働構築する「見えない第三の主体」が存在する可能性が見て取れた。発話者の意見や姿勢を逆転させる影響力を持つこの第三の主体の出現の前触れとして「自己相植」が現れる可能性も見出された。この結果から、言語学や社会学において、今日の多様な文化や言語の交わりというコンテクストに根差した研究における主体の複数性の概念の発展が大いに期待できると考えている。しかし「内なる声」や「見えない第三者」などをどのように明確化するかは難しい課題であり、現時点で述べている内容が漠然としたアイデアにとどまっている印象はぬぐえない。また、この現象を「自問自答」という大きな枠でとらえてみれば、全言語、文化、人間に共通する思考と発話の生成過程と考えることも不可能ではない。そのため、在仏日本人の語りに現れる内なる声や第三者との呼応の仕方やそれが現れる詳細な条件と特徴を、他の言語や文化背景を持つ人びとの談話との比較によって抽出する必要がある。

(東北大学大学院文学研究科博士後期課程)

註

¹⁾ 協力者の名前は筆者が任意に付けた仮名であり、引用内の協力者の発話のうち、個人を特定しうる固有名詞や都市名を匿名としている。また、特にフランス語での発話は文法的に整合性のない部分があるが、本稿では元の発言を維持することを選択している。

²⁾ 本稿中の談話の全ての下線、斜体は筆者による。

引用文献

- BERTAUX Daniel, *Les récits de vie : perspective ethnosociologique*, Nathan, 1997.
- DESCOMBES Vincent, *Le parler de soi*, Barcelone, Gallimard, 2014.
- DUTEIL-OGATA Fabienne, « La photo-interview : dialogues avec des Japonais », in *Ethnologie française*, n° janvier, 2007, pp. 69-78.
- KAUFMANN Jean-Claude, *L'invention de soi*, Paris, Armand Colin, 2004.
- KAUFMANN Jean-Claude, *L'entretien compréhensif*, 3^{ème} Edi, Armand Colin, 2011.
- KERBRAT-ORECCHIONI Catherine, *L'énonciation : de la subjectivité dans le langage*, 4^{ème} Edi, Armand Colin, 2009.
- LAHIRE Bernard, *Portraits sociologiques : dispositions et variations individuelles*, Nathan, 2002.
- LAHIRE Bernard, *L'homme pluriel : les ressorts de l'action*, Armand Colin, 2005.
- MAINGUENEAU Dominique, *L'analyse du discours : introduction aux lectures de l'archive*, Hachette, 1991.
- MAZIERE Francine, *L'analyse du discours*, Presse universitaires de France, Coll.« Que sais-je ? », 2005.
- PRIEUR Jean-Marie, *Linguistique barbare*, Université Paul-Valéry Montpellier III LACIS, 2005.
- PRIEUR Jean-Marie, « Contact de langues et positions subjectives », in *Langage et société*, n° 116/juin, 2006, pp. 111-118.
- ROBERT André Désiré et BOUILLAGUET Annick, *L'analyse de contenu*, 2ème Edi, Presses universitaires de France, Coll.« Que sais-je ? », 2002.
- YATABE Kazuhiko, « Des Japonais en France », in *Pratiques et représentations sociales des Japonais*, 1993, pp. 196-217.
- YATABE Kazuhiko, « Auto-image et hétéro-image : représentations du Français et du Japonais chez les migrants nippons en France », in *Mots*, n° 41, 1994, pp. 129-152.
- 稲井文 (2005) 「あいづちの心的効果について」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 pp. 218-231. 京都大学
- 岩崎久美子 (編著) (2007) 『在外日本人のナショナル・アイデンティティ—国際社会における「個」とは何か』明石書店
- 上田安希子 (2008) 「日本人はどのように意見を述べるのか—日米の「グループの中で意見を述べる」談話の対照分析から—」『日本女子大学英米文学研究』 pp. 21-36. 日本女子大学
- 片桐雅隆 (2000) 『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社
- 久保田真弓 (2001) 「閉き手のコミュニケーション上の機能としての「確認のあいづち」」『日本語教育』 pp. 14-23. 日本語教育学会
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 秦かおり (2013) 「「何となく合意」の舞台裏—在英日本人女性のインタビュー・ナラティブにみる規範意識の表出と交渉のストラテジー」『ナラティブ研究の最前線—人は

- 語ることでなにをなすのか—』 pp. 247-271. ひつじ書房
- 服部文香・佐々木玲仁 (2016) 「日常会話における自己語りのプロセス—雑談の会話テクストの分析から—」『九州大学心理学研究:九州大学大学院人間環境学研究院紀要』 pp. 35-44. 九州大学大学院人間環境学研究院
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『言語』 pp. 46-53. 大修館書店
- 矢野禎子 (2016) 「海外移住と言語使用—日本人フランス移住者の移住談にみる主体と主観性の複数性—」『フランス文学研究』 pp. 27-40. 東北大学フランス語フランス文学会
- 矢野禎子 (2017) 「『日本人らしさ』とフランス移住—在仏日本人の移住談内に見る日仏への表象の特徴と主体の複数性—」『文化』 pp. 192-211. 東北大学文学会
- 山本真理子・原奈津子 (2006) 『他者を知る—対人認知の心理学』サイエンス社
CLAPI,
<http://clapi.icar.cnrs.fr> (2017年11月10日閲覧).

Le « troisième sujet » dans le récit de migration de Japonais en France

Teiko YANO

L'utilisation de corpus construits par le biais d'entretiens prenant la forme d'un récit de vie se développe de plus en plus dans plusieurs domaines de la recherche scientifique du fait de leur richesse d'informations. En même temps, le manque de scientificité et de possibilité de vérification des informations est souvent présenté comme une faiblesse de cette méthode car la construction de récit se déploie dans une relation humaine, dans des conditions « non-neutres », situationnelles, interpersonnelles, émotionnelles. Les chercheurs cherchent par conséquent à faire disparaître au maximum l'influence qu'ils peuvent avoir sur la parole des informateurs.

Utilisant moi-même des récits de migration de Japonais en France comme corpus de recherche, il m'a semblé inévitable de réfléchir à la position du narrateur et du narrataire dans mon corpus. À la suite de l'observation de quelques passages de récits des Japonais réalisés en français, avec une attention particulière portée à des expressions comme « oui » et « non » qui demandent habituellement l'existence d'un interlocuteur, il est apparu la possibilité d'un « troisième sujet », invisible dans le lieu de l'entretien. Contrairement au discours réalisé par des locuteurs qui ont le français ou l'anglais pour langue maternelle, le discours de Japonais contient nombre d'« auto-réponses » comme « oui » et « non » qui ne sont pas forcément adressées au narrataire. De plus, l'apparition de cette auto-réponse fonctionne dans leur discours comme l'indice d'un changement de point de vue. La fréquence de l'expression de l'adhésion à la parole de l'autre, la co-construction du discours avec l'autre, le manque de cohérence du point de vue exprimé dans une conversation ou une discussion ont souvent été mentionnés comme des caractéristiques de la construction du discours élaboré par des Japonais ou du discours en japonais. Cette recherche a démontré que les Japonais gardent ces caractéristiques discursives même dans une situation d'entretien où il existe une nette différence entre le rôle du « narrateur » et celui du « narrataire », et même lors de l'utilisation de la langue française, qui implique des discours aux traits différents. Mais si l'on émet l'hypothèse que le sujet est pluriel et que l'expérience migratoire, expérience de déplacement et de disjonction, accentue ce fait, il est possible que les « auto-réponses » de Japonais dans le récit de migration fonctionnent comme un signe de l'apparition d'un autre sujet que celui qui est devant nous. Ce « troisième sujet » dans une situation de construction du discours sur l'expérience migratoire doit occuper une place importante et avoir une grande influence, susceptible de modifier l'avis déjà exprimé par le sujet.